

佳作

ぼくが変化した

東京都 暁星中学校二年 山口曜

「エントリーナンバー四番、山口曜。」
ぼくの名前が読み上げられた。ここは川口にあるリリアホール。大きなパイプオルガンがある、縦長の立派なホールだ。重い足を引きずるようにゆっくり歩き、舞台上のピアノの前にたどり着く。喉がカラカラだ。でも、伴奏が始まり、何度も練習した曲、フォーレの『ピエ・イエズ』を歌い始めた。

それから後のことはあまり覚えていない。緊張していたと思うが、とにかくあっという間に終わった。舞台袖から外に出ると、声楽の先生と、涙ぐんだ母の笑顔が見えたので力が抜けていく感じがした、と思う。

ぼくは三歳になるまで、家族以外の人と口を聞いたことがなかった。言葉を発するのは早かったらしいが、習い事や近所の人に話しかけられても一言も

声を発することがなかったのである。当時通っていた習い事の先生に、場面緘黙（ばめんかんもく。言葉を話せるのに一定の場面でしか話さない）が疑われるので、病院で検査を受けるように助言され、母はかなりショックを受けたという。そしてしばらく、メンタルクリニックに通院し、行動セラピーやいろいろな検査を受けた。その結果、極度の人見知りではないかということだった。そして幼稚園、小学校に入り、人見知りは治らなかったが、自然に、少しずつ人前で言葉を発することができるようになった。今でも、人前で話すことが大の苦手だし、注目されることなんて本当に嫌だと思う。ましてや人前で歌を歌うなんて！それも一人で歌えるようになるとは思ってもよらなかった。

小学四年生に上がる頃、新型コロナウィルスの蔓延で学校に行く回数が減り、当時所属していた学校の聖歌隊の活動もなくなった。ぼくは話すことは苦手だけれど、歌うことは好きだったので、大勢で歌う聖歌隊の練習は苦ではなかった。歌う機会が失われてしまうことを危惧した母が、声楽のレッスンを受けてはどうかと勧めるので何となく受けてみた。そして、変声する前の一生の記念だからとおだてら

れ、声楽コンクールに出ることになってしまったのだ。

誰かに聞いてもらうために歌うことなんてなかったし、舞台上で一人で歌うなんて想像もできなかった。でも、これができるなら何かが変わる気がする…。

中学二年、もうすぐ十四歳になるぼくはもう声変わりをしてしまった。あの頃のボーイソプラノの澄んだ声ではもう歌うことはできない。でも母は、何度も当時のビデオを見ては懐かしんでいる。ぼくはぼくで、緘黙ではないかと心配されていたのに、人前で歌った、やりきったということ目の方が明るくなっていった気がする。舞台の上から客席を見たあの感じ、少し怖かったけど楽しかった。今は低い声になったけれども、まだ声楽を続けている。今後も挑戦してみせる。